

令和2年12月18日発行

若 樹

第216号



日本舞踊を通して 美を感じる

(日本伝統芸能体験教室にて)

東村山市立東村山第二中学校

「情けは人のためならず」とは・・・

校長 渡邊 宏一

残暑が厳しかった8月24日（月）からスタートした2学期も残り一週間となりました。現在も感染症の状況は、依然として学校生活にも大きな影響を及ぼしていますが、感染症の防止対策を講じながら、運動会に替わる「体力向上スポーツ競技大会」を10月下旬に学年ごとに、八組では校内マラソン大会（3000m走）を12月上旬に実施しました。また、授業においても、ICTの活用や授業内容を工夫するとともに、3密の回避と換気を十分に行いながら、学習活動を進めてきました。

現在は、教員と生徒の二者面談や教員と生徒、保護者との三者面談で、2学期の成果やこれからの課題・進路を確認しているところです。特に、3年生においては、卒業後の進路目標が具体的に決まり、さらなる学力の充実を図っています。私も3年生の面接指導を一部担当していますが、緊張しながらも自分の将来について、しっかり話してくれる生徒も多くいました。

さて、私が昔に観た映画を1つご紹介します。それは、アメリカの『ペイ・フォワード 可能の王国』という作品で日本では、2001年2月公開にされました。原作は、「PAY IT FORWARD」で直訳すれば、「次に渡せ」という意味ですが、キャサリン・ライアン・ハイド氏の小説です。

ストーリーは、中学1年生になった主人公トレバー少年の担任の先生でもある社会科のシモネット先生から「もし、自分の手で世界を変えたいと思ったら、何を？」と大きな課題が与えられます。生徒達はまだ中学1年生ですので、幼稚な考えが多かったのですが、トレバー少年は、違っていました。彼の提案した考えこそ、後に世界を変えることになる「ペイ・フォワード」でした。

「ペイ・フォワード」とは、自分が受けた思いやりや善意をその相手に返すのではなく、別の3人の相手に渡すというものでした。トレバー少年は思いやりや善意を“渡す”相手を探しました。そして、仕事に就かない薬物中毒の男やシモネット先生、いじめられている同級生などに思いやりや善意を行い、そのお返しは誰か他の3人に渡すというアイデアを実行したのです。彼の考えでは、善意を受けた最初の人は、その善意を次の3人に渡し、9人になり、27人になり、81人になり、次には243人、729人と広がっていく計画でした。

そんなことは不可能だと言ってしまうのは簡単なことです。でも、そんなことが実際にできたら、本当に素晴らしいと思い、私は感動しました。映画でも、彼は、いろいろと試みるものの、なかなかうまくいかず、「ペイ・フォワード」は失敗だったと思い始めました。しかし、そんなトレバー少年を見ていた母親が、彼には内緒でこの運動を続けることで、彼の努力は日に日に報われました。遂にはテレビに取材されるなど、波紋は着実に広がっていきました。

さらに、この映画の最後には思いがけない結末が待っているのですが、それはぜひ、ご自身で確かめてください。原作者のキャサリン・ライアン・ハイド氏は、小説「ペイ・フォワード」の誕生についてこう語っています。ある日、治安の悪い町で車がエンストしてしまったハイド氏は、車に近付いてくる男2人に恐怖心を抱きました。しかし、その男たちは、ハイド氏の車を快く修理してくれたのです。その実話から、この“善意を他人へ渡す”という発想が誕生したそうです。

話は変わりますが、日本にも「情けは人のためならず」という言葉があります。この意味は、「情け（＝思いやり）は他人のためだけではなく、いずれは巡って自分に返ってくるのであるから、誰にでも親切にしておいた方が良い」ということです。この言葉は日本固有のものではなく、英語にも「A kindness is never lost.」（親切は決して無駄にならない）という言葉があります。また、他の多くの言語にもこれに相当する言葉が存在するそうです。情けや思いやりなど、他人からの善意を受けた人は、いつか困っている人を見た時は、「今度は自分が善意を渡す番だ」と考えるのは、特別な発想や感情ではないと思いました。

さらに、脳科学の研究によると、「どういう行動をしたら、他人を喜ばせることができるのか」を考えることで脳の機能が高まるそうです。また、「他人の役に立ちたいとか、社会に貢献したい」ということでも、脳の考える力を高めることになるようです。

つまり、「情け＝思いやり、他人のためになること」を考えたり、行動すること自体が自分の脳を鍛えることになるのです。やはり、「情け（＝思いやり）」は、人のためだけではなく、自分の脳にも良い影響を与えることになるようです。それでは、良い年をお迎えください。